

花ゲリラ伝説

プロローグ

(一)

むかし、一対のゲリラがいました。このゲリラたちは、とても機敏で、精力的でした。ある時はジャングルの繁みに潜み、またある時は都会の雑踏の中や工場の煙突の中。そうかと思うと河岸の草の合間やゴルフ場の芝生の上に伏せ、一日の終わりには、とある建物の一室で二人っきりの作戦会議。神出鬼没のゲリラなのです。

この二人のゲリラは、とても愛し合っておりました。そもそもの馴れ初めは？とお尋ねですか？よく尋いてくれました。お話いたしましょう。お話の途中、どんな可笑しいことが出てきても、これは、れっきとした悲劇なのです。涙のためのハンカチを予めご用意くださいますよう、お願い申し上げます。

はじまり、はじまり。



アル中の神様がわけの分からない指令を発す

(一)

ある日、神様はアルコールに漬れた声で、こんな風に命じました。

「おい。兵隊。お前どお前。今日から組んで作戦×号を実行せよ」

神様の命令は絶対なんです。民主主義なんて20世紀という遠い昔、地球上で、1度も完成しないうちに滅びてしまったのです。

オスゲリラはメスゲリラに会うやいなや、いきなり彼女の丸いお尻を撫でたのです。メスゲリラはあいにく合気道初段の腕前をもっていました。オスゲリラの関節をきめて投げ飛ばしてしまいました。でも彼女は非常な不安を感じたので、神様にお伺いをたててみました。

「神様、あのオスゲリラはわたしに投げ飛ばされるふりをして、空中から私の唇を奪ってしまいました。これも任務のひとつでしょうか？」



(二)

神様は血圧が200まで跳ね上がったかのような顔をして、

「なぬ？こんだな宇宙一のブスぬまで手をだすつうどは」

「まっ。わたしはブスですかッ」

「え？なぬ。過敏ぬなるなっでば。ひどりごどだ。」

神様は、すっかりつるつるになった頭をつるりと前から後に撫でながらぶつ

ぶついいました。

「唇を奪ったど？あいつは、敵から何ひとつ奪えねえくせに、えつも奪うのは、味方のメスからだけなんだ。悪癖だ。その癖が出ねえようにど思って、由緒ある血統書付のブスをつけでやっだつのに…」

メスゲリラに全部聞こえていました。

「んまあ！オスってみんな、どうして。んまあ！わたしのことをそんな！…」

トーンが1オクターブも2オクターブも上がって可聴領域を超えてとうとうメスゲリラの声が聞こえなくなった頃合をはからって神様は厳かに、

「オスゲリラ H 号ど共ぬ作戦×号を続行するべす」

と再度命じたのでした。

(三)

メスゲリラはそんなブスかって？いいえ、とんでもありません。彼女の髪は直毛で長く黒曜石の輝きをもち、顔は卵形で顎がとんがっており眼元はくっきりしており、眼は切れ長で内側の目元はくっきりしており、鼻梁は明快で先まで細く、鼻頭はすっと高く、そして笑顔の時の唇はとりわけ恰好がよく、紅をつけなくとも薔薇色に光を放ち、耳はやや大きくて髪から耳を出して小さなピアスをするとひきたちます。

声は、彼女の専門の「ゲリラのための経済学」とか、「ブスゲリラ哀史」を論ずる時などピッチが下がって、早口になりますが、オスゲリラに話かけたり、あるいは怒ったりする時は急にピッチがオクターブ上がり、甘美な旋律となって口からほとぼしります。

そして、特筆すべきはメスゲリラの肌の色。かつて、オスゲリラがブリタニア国で作戦行動中、バラ色の肌をもった少女にちょっと恋をしたことがありましたが、メスゲリラのそれは淡い桜色でした。

しかし、そのメスゲリラにも大きな欠点がありました。彼女はおそろしく視力が悪いということです。

(四)

他方オスゲリラはどうでしょうか？その顔は全くお話になりません。鼻は低

い。たくわえようにも剃り残した以上には生育しないチョビ髭。瞳はアルコールでとろんと濁り、猫ならとうの昔に化けて出る程年をとっているの、まるっきりたるみっぱなしの肌、というより皮。お腹はあくまで膨張気味。そして、短足でガニ股。声はしゃがれていて聞き取り困難。いやはや、なんともひどい代物でした。

ところが、残酷で皮肉な神様は、オスゲリラに特殊な眼鏡を与えました。それをかけると自分自身をあるがままに見られなくなるかわりに、あってもらいたいように見られるようになるのです。だから、彼は宇宙一の美貌とマッチョな肉体をもつオスだと思いこんでしまったのです。こんな彼が精力的にメスゲリラたちに声ばかりでなく、手までかけていたのには、そんなカラクリがありました。

(五)

オスゲリラはメスゲリラにその桜色の肌に因んで「チェリイ・ニンフ」（櫻の妖精）というゲリラ名を献上しました。それが訛^{なま}って「チェリンフ」（和名：櫻子）となります。メスゲリラの方は彼のことをまるで風来坊、^{ふうてん}瘋癲、風船、風疹のようだと思いましたので、「ふうさま」というゲリラ名をつけました。それが訛^{なま}って「ふうま」となります。どこまでも自惚れの強いオスゲリラのことで、すから、「ふうま」を「風魔」だと思い込み、^と速きこと・激しきことと風林火山のごとく、強きこと風神のごとく・敏捷なる忍者「風魔」一族のごとく。こんな自分へのチェリンフの愛と敬意の尊称と受け取って、とてもいい気になっていました。

「それはそうと、神様」とチェリンフはさらに尋ねました。

「わたしたちの任務は一体なんですか？」

「ん…。そ・そりは、ありに命ずである。」

「でも、あの方は、人目をしのんでは、キョロキョロ、ウロウロするだけなんですよ。」

「ありには、ありの考いがあつでのごどだあよ。」



“ふうま” おちこむ

(一)

チェリンフ（和名：櫻子）は、神様の歯切れの悪い答えに不満でちょっと小首をかしげながら考えました。

『それじゃ、私は“ふうま”のあとにくっついていけということか。私はすごい近眼だから、“ふうま”にペタリ張り付いていないと、宇宙の孤児になってしまう』

チェリンフがいつも“ふうま”のどこかにつかまっていることは、実はチェ

リンフの並外れた視力の弱さから来る、やむにやまれない行為だったにもかかわらず、“ふうま”はそれをチェリンフの彼への愛の証しと思いこんでいました。

“ふうま”は、ある日から突然、じっと考えこんだまま、あまり移動しなくなっていました。チェリンフの方に視線をやることもなく、反対に彼女の視線を避けるようにさえなりました。彼女が絡めてくる腕に対しても、任務だからしかたがない、という態度をありありと示しました。

いったい“ふうま”はどうしたというのでしょうか。

(二)

ため息まじりに、チェリンフを見る眼には悲しみと怒りと、それでもなお燃えるような意志とが宿っていて、彼女はハッとすることがありました。

おそらくこの突然変異の原因は、

『あたしにあるんだわ』

そうチェリンフは思うようになりました。

数日前、こんなことがありました。その日の任務…といってもチェリンフは訳も分からず“ふうま”の言われたとおりにただで、任務を終えた夕方。河川敷の背の高い葦草の影に二人は腰をおろしました“ふうま”は例によってチェリンフを抱きすくめ、キスをしようとしてしました。いつもなら彼女が身をよじ

らせたり、ダメッと睨む^{にら}、彼は照れ笑いを浮かべ、鼻水をすすりあげておしま

いになるのですが、その時ばかりは奇妙にしつこかったので、頬^{ほお}を軽くピツシヤリとやってしまいました。そのひょうしです。“ふうま”が神様からもらったあの眼鏡が落ちました。はずみというのは、どうしようもないもので、たまたま土から出っぱっていた石にコチンと当たってしまいました。眼鏡は両眼とも壊れました。“ふうま”が変わったのはそれ以来でした。チェリンフはキスを拒んで、ひっぱたいたことが“ふうま”の心に傷をつけてしまったのだと思い悔やみました。しきりに“ふうま”を慰め、気を引こうとしました。

(三)

「“ふうま” ごめんなさい。わたし神様にお願ひして、もうひとつもらってくるから。」

“ふうま”は初めてチェリンフの存在に気づいたように、

「えっ。ああ。あのこと？チェリンフ。眼鏡のことはもういいんだよ。作戦は中止だ。」

「やっぱり、あれ、作戦に必要なだったの」

「チェリンフ。もういいってば。お願いだから少し黙ってて。」

「ねえ、“ふうま”。最近どうしてわたしを見てくれないの。」

「……」

“ふうま”は膝小僧を両腕で抱え、それに顎を乗せてじっと、川面を見つめていました。泣いているようにも見えました。チェリンフは、驚いて、思わず“ふうま”の肩にとりすがろうと身を開きかけたときでした。彼はチェリンフに見向きもせず、水面に羽を休める鴨にでも語り掛けるようにして、いました。

「ねえ。チェリンフ。ぼくらの子どもを作らないかい。」

あまりの唐突に、彼女は息を飲み込んだまま、身を固くしていました。やがて息は熱い喘ぎとなり、頬は八重桜の色に染まりました。

(四)

「あーっ」

“ふうま”は彼女に与えた動揺と羞恥心を察すると、自分自身もつと動揺と羞恥心を覚えたようになって、

「そ・そんな意味じゃないよ。」

うろたえて打ち消しました。そして、意外な話を始めたのです。

「ぼくはねえ。初めて自分の眼で自分の本当の姿を見ることができたんだよ。あの眼鏡が割れてしまったおかげでね。」

その時彼は何か恐ろしいものを見たかのようにあわてて頭を振り、顔を脚と脚との間に押し込むようにして、語り続けました。

夕闇は二人をつつみ、水面は、はや白く光り、石ころのような鴨が無数に浮いていました。

「神様はぼくを欺いて自分自身を美しく気高く見せかける魔法の眼鏡を与えてくれたんだよ。」

“ふうま”の声は曇ってほとんど聞こえませんでした。

「え？神様が“ふうま”をどうしたって？」

チェリンフは不吉な胸騒ぎを感じておそるおそる尋ねました。声を低めて。

(五)

「さっき作戦中止と言ったわね。神様がそう言ったことなの？それとも…」

「ぼくが決めた…」

チェリンフは悲鳴に似た声をたてました。水面の石ころが、少しざわついたようでした。細かい波紋がいくつもいくつも広がっていきました。

「いけないわッ。“ふうま”！神様は決して許さないよ。“ふうま”は死…」

“ふうま”は後を引き取って

「…刑は避けられないだろうな。」

しばらく、沈黙が流れました。ふたりの心臓の鼓動が互いに共鳴し合っているように激しく互いの胸を響かせています。

「ね。“ふうま”。短気はいけないわ。作戦×号って何だったの。わたしが知ってはいけないこと？」

彼は、やや間を置いて、また話題を転換しました。

「チェリンフ。神様の頭にはとうとう毛が1本も無くなってしまったよね。」

彼女は、

『助かった』

と心で叫びました。“ふうま”がつまらない考えを放棄したかと思ったからです。なんとやったって神様は絶対的に怒りっぽくて、絶対的に嫉妬^{しつと}深くって、絶対的に私有財産を愛して、絶対的に残酷です。神様はその意味で絶対なんです。

“ふうま”奮戦すれど

(一)

『助かった』そう思うと、チェリンフは涙がはらはらと落ちるのをどうすることも出来ません。右手のひらで、左右の涙をぬぐいながら、彼女はいいました。

「フッフ…。神様、すごく気にしてんのよ。無意識のうちに頭をなでるのがおかしくって。」

「それがねえ。おかしがってばかりはいられないんだよ。」

「……？」

「作戦×号というのはね」

“ふうま”はそういいつつ、いきなり顔をチェリンフの方に向けました。夕陽の逆光でしたが、“ふうま”の眼だけは白く光っていました。

「ジャポニカ国を初め地球上全世界の草木や花をぜーんぶひっこぬいてしまえ。つるつるにせよ。ということだったんだよ。」

「……！」

「そうしたら、ほうびは望みのままだというんだ。ぼくはチェリンフを見た瞬間から、こいつをほうびにいただいちゃおうと思ったんだ。」

チェリンフはその言葉の中に秘められている女性差別的言辭に気がつかないくらいに、これまでの作戦行動を深く思いかえしていました。

“ふうま”がチェリンフとともにとった主な作戦行動は、こんなふうに人間たちに説き、彼らを誘惑することでした。

“みんな、できるだけ集まって高いビルの中に暮した方が土地の利用効率が向上する上に便利にもなるぜ。空いた土地には工場団地をバンバン造って、工場にやりたい放題やらして生産を高めようぜ。能率の悪い農場なんかどどんぶつつぶすか、化学肥料農業に大量投入して生産性を上げようぜ。山林の樹木はパルプにするか住宅建設などのためにどンドン伐採して、裸の山になったら、それを削って平らにして、土は海に持って行って埋め立ててさ。もと山林に従業員住宅を、もと海にコンビナートを建てようよ。そうすれば、みんな今よりも2倍も3倍も豊かな暮らしができるようになるよ。約束するよ。そのためには、動脈として産業道路や超高速鉄道などの巨大なネットワークが必要だよな。エネルギーとして石油や原子力を世界中から集めてガンガン炊かなくっちゃ。”

その効果はてきめんでした。都会はびっくりする程コンクリートで急速に固められ、大きく膨張していきました。農地は急速に化学肥料でコンクリート状に固められ、狭くなり放棄されていきました。沿岸住民は埋め立て地で目隠しされ、潮風の代りに硫黄臭のドス黒い風を嗅^かがされました。もと山林には、地すべりが発生し、洪水が発生し、砂漠化への途をたどっています。

(三)

チェリンフは、そうした作戦行動を行っている時には、都会の片隅の小奇麗な団地に巣を作って、

『えーと、うん、“ふうま”でがまんしちゃおうかな。』

“ふうま”と棲むことを夢みるようになっていました。それなのに、“ふうま”

の狙いは、いや神様の狙いはまったくチェリンフの想像を超えるものでした。

「眼鏡が割れて、ぼくが己の無残な老骸^{ろうがい}をあるがままに見、チェリンフの若さと輝きをもあるがままに見た時、神様に命令の変更をお願いに行ったんだよ。死を覚悟の上でね。だってゲリラには自分の意志をもってはならないんだから」

チェリンフは何度もうなずきながら、

「“ふうま”、どうしてひとりでなんか行ったの。私たちはずっといっしょに行動してきたでしょ」

「まあ、聞いてくれ」

その時神様は1,100円のサントリーQ500のボトル1本あらかた平らげて、机に耳をつけるようなかっこうで、眠っていました。神様はアルコール燃料で頭は真っ赤にてらてら輝いていました。神様の後光のようなものの秘密が、この時“ふうま”にやっとわかりました。

こういう時に起こすと神様は気が狂ったように暴れ怒鳴るか、雷雨のように大声で泣くか、どっちにしても、今の“ふうま”はそれをなだめる元気がありません。

途方にくれて、ふと背後の黒板を見ると……酔っ払いのなぐり書きなので、始めは意味がよくわからなかったのですが…こう書いてあるではありませんか。

(四)

『作戦×号失敗。直ちに該メスゲリラは「ヤング」ことオスゲリラともに、銀河系外アンドロメダ大星雲内ハニ・ムーン星にて作戦Y号を遂行すること。なお、ゲリラH号は速やかにゲリラ廃兵院に収監のこと。以上』

しかも『注』まであって、

『ゲリラH号は最近^{ふうてん}瘋癲の気が^{こう}高じているので危険である。よって収監に際しては、武器を携行すべし』

「まあ一つ。何てひどいことを。作戦が終わってないのに。」

“ふうま”は咳きこんでいました。

「これで、ぼくの運命が定まったよ。あの眼鏡は、使いものにならなくなった老馬に与える最後の鞭^{むち}だったというわけさ。チェリンフ。君だって、君自身も老馬に最後の夢を見させる神様の暖かい思いやりだったかもしれないよ。」

チェリンフはもっと急いで言いました。

「何かのまちがいよ。あなたが老馬だなんて、そんなふうを考えるのはやめてよ。“ふうま”はステキよ」

「あは。“チェリンフのド近眼に幸いあれ”だ。」

「ふ・う・ま。ねえ。ひねくれないでよ。ゲリラ廃兵院なんてまちがいよ。」

「チェリンフ。あゝぼくの最後の女。チェリンフ。君は自分が何を言っているのか気がつかないんだよ。神様がまちがえるはずなんか、ないッ。そんなことを言うだけでも厳罰なんだぞ」

(五)

チェリンフはもう泣きじゃくっています。ふたりはすっかり闇の張^{とぼり}の中。遠くに化学工場のフレアタグの炎が蛇の舌のようにめらついています。それは何百万年も、何億年も前の生物たちの死体焼却場です。チェリンフはそれを見つめながら宣言しました。

「わたし決心した。誰にも止められない。わたしゲリラ廃兵院の看護師に志願するッ。」

「え一つ」

“ふうま”は憐れみと愛^{いっくし}しみと恐怖心をミキサーにかけてウイスキーで割ったよう

な表情を浮かべていました。

「ぼ・ぼ・ぼくの^{ろうしゅう}老醜をみたいの？」

「何言ってるの。側にいたいだけなんだから」

「その言葉は、あの眼鏡をかけている時に聞いたかった。でも、それはいけないよ。」

「どうして？神様はわたしのお願いなら…」

「だめだよ。知ってるくせに」

闇の中に、どこからともなく、桜の花びらがヒラヒラ落ちてきました。



愛さえあれば、“ふうま”の逆襲

(一)

チェリンフはふとその花びらを指でつまみ、それに向かって、つぶやくように呼びかけました。

「ふ・う・ま」

「ん？」

「さっき、さっきね…」

「何だい？」

と突然あっちの方で、バチャバチャという水音がきこえます。ふたりはとっさに身を伏せ、その正体を見極めようとします。しばらくして

「寝ぼけ鴨が^{おぼれ}溺れそうになった音だよ。」

と結論がでました。ふたりの姿勢はそのまま、どころか、右腕はチェリンフの肩を包むようになっています。彼女は“ふうま”の胸の下にますます潜り込むようにしています。チェリンフはその下から尋ねました。

「さっき、“ふうま”が言ったでしょう？」

「うん。いろいろなことをいいすぎたよなあ。それだけでも死刑に値すると思うよ。」

「そうじゃなくて。ほら、コドモがどうだこうだ…どうということ？」

(二)

「あっ。忘れていた。そこから今日のミーティングが始まったんだね。チェリンフとぼくの子供を作らないか、ということだろう？」

チェリンフは彼があんまりあつけらかんと言うので、ちょっとがっかりしつつも、それでも身がぎゅうと硬わばるのがわかりました。彼女の脈拍は鴨の水音で驚いた時以来、いっこうに衰えません。“ふうま”の胸に顔を押し付け、そこでコックリしました。

こんどは“ふうま”の心臓が高鳴る番でした。唇が乾いてうまくしゃべれません。

「チェリンフ。君は愛という言葉を使うのを嫌ってたよね。現在の気持ちは愛ではない、親しさ・仲良し・いや懐かしさ、せいぜいのところ恋にすぎない。と思って

いるよね。そして、本当の愛は神様が定める男との協働にのみあると考えているよね。ね、そうだろう？とすれば、君はあの黒板にかいてあった『ヤング』ことオスゲリラに君の愛を捧げるべきなんだ」

“ふうま”こそ、“言葉は本心を隠すために作られた”という格言を地で行っているゲリラに他なりません。

(三)

チェリンフは、

『こいつめ。わたしの「愛」を誤解しているな』

と心の中で思いました。

『あたしは「人間愛」とか「神の愛」とかいうように、愛という言葉が普遍的なものに向けて用いたい、と思っているのに、こいつめは、あたしに普遍的な愛を求めている。ばかな“ふうま”』

「“ふうま”、どうしてそんないじけた言い方をするの？」

「そういうつもりではないんだ。」

「じゃ、こう言えばいいわけ？わたしは“ふうま”を恋し、愛している。と」

「オイ。ふざけてるのか。」

「愛してるワ」

「……。神様の意志は……」

「それでも愛してる」

「チェリンフ！罪になるよ。君をぼくのような罪人の仲間に入れるわけにはいかないよ。」

そう言いつもつ“ふうま”は右手の中指をチェリンフの右肩の内側にあるふくよ

かな部分に強くくいこませるのです。 “ふうま” の神をも恐れぬいやらしさは魔性のものというほかはありません。そしてぬけぬけとつぶやくのです。

「あゝ神様。チェリンフは宇宙一の美人であり、宇宙一のド近眼であることに感謝します。」

突然呼びかけられた神様はハークションとくしゃみを一発して、

「うるっせいな。ごつそさま」

口の中でごによごによ言って、今度は反対側の耳を机にくっつけて、再びゴンゴン眠ってしまいました。

(四)

チェリンフはもう身をよじらせて、“ふうま” の指を避けません。そのままにさせながら、首をかしげてたずねました。

「“ふうま” はわたしのことを美しい、というよね。冗談でしょ？」

「冗談じゃないッ」

ときっぱり。

「眼鏡をとってあるがままに見ても美しいと思う？」

「あるがままに見ても、君の美しさは最高だ。芸術とは醜いものみにくいの中から美しいものを引き出す技術（アート）だけど、チェリンフは美の中の美だから、芸術も技術も洞察もまったく不必要なんだ。」

チェリンフは照れて、

「ちょっと起こして」

と座りなおして、そのまま “ふうま” に背もたせかけて言いました。

「“ふうま”がそういうのはうれしいんだけど、神様は、あなたが手を出したがないような宇宙一のブスを組ませたと行ってたよ。」

可愛いかな憎たらしいかは主観的なものですが、美しさは主観的な好みを超越しています。美は客観的なものです。だから、神様とゲリラとの間に美に関する矛盾があるはずがありません。もっともゲリラには固有の認識や意志があってははいけませんから、神様が白だと言えば、黒いものでも白だと思わなければならないのがゲリラの宿命です。

“ふうま”は驚きました。神様は真理以外のことを言ったりするなんてないですから、冗談を言うはずもありません。神様はつきあいにいくくらい真面目なんです。

(五)

以前の“ふうま”なら、チェリンフはブスだ、と神様が言えば、「はいチェリンフはブスです。」と思ったに違いありません。しかし、今は、「ちょっと待てよ」と考え込んでいます。神様と“ふうま”との間に、初めて、何千年以来、ひとつの矛盾が次々にその姿を現しつつあるのです。

『オレは チェリンフを愛している。というより恋していた。恋という状態はたしかに、“あばたもえくぼ”で人を盲目にしてしまう。恋は相手の欠点や弱点も、むしろその故にそれを哀しみ、愛することを可能にする。チェリンフは神様がブスだと言った。オレは美しいと思う。オレは恋しているからそう思うにすぎず、本当は神様のいうようにチェリンフは不美人なのかもしれない。たとえそうだとしてもオレの気持は変わらない。それにしても、どうも変だ。神様は、オレが手を出したがない程の代物だと言った。神様はオレの立場になって判断した。ところがオレは、ここにこうしてチェリンフの髪の毛をいじっているではないか。この矛盾はどう解決するのだろうか。』

盲目的・情緒的信仰の果てるところに理性がよみがえります。論理学だけが真理を見つけだせるのです。

「ねえ。何をブツブツ言ってるの。ひとを抱きながら、ひとりっきりにならないで。さっきの、わたしたちの子供の話さ。」

「しっ。少し黙っててくれよ。『まてまて神様がチェリンフのことを子供』だと？…えい。こんがらがっちゃった」

「“ふうま” ってば。わたしたちの子供もド近眼になるかしら？」

「えっ？今なんていった？」

「いやあね。もういいッ」

「おねがだから、今何か言ったよね。教えてくれ。」

「だから。いやねえ。あのねえ。わたしたちの子供もド近眼…」

「そ・それだあ！」

すっとな狂な驚き。

「わかった！わかったぞ。チェリンフ。あははは…そうだったのか。イヒヒヒ…」

チェリンフは“ふうま”が発狂したのかと思い、ふりむいて熱心に彼の眼をみつめていました。“ふうま”は涙をふきふき。

「エへへへ…ごめんごめん。ぼくたち助かるかもしれないよ。今わけを話すから。ちょっと待ってて。」



ゲリラの「闘い」

(一)

「ぼくは神様の意志に違反してしまった。死刑に値する重罪だ。まずこれを確認しよう。」

ふたりは対面して、手を取りあって、互いの瞳^{ひとみ}をくいいるようにのぞきこみました。相手のどんな気持のひだも、変化も、あやも見逃すまいと。チェリンフは生唾をゴクンと飲んで必死にうなずきました。

「それから、わたしもよ」

「……。よし。チェリンフもだ。」

「うれしいッ」

「次に。ぼくたちに残されている道は闘うことしかないこと、これも確認しよう。」

未だに、一度も神様の定めに運命にさからったこともないチェリンフ——この点では“ふうま”も同じ——には「闘う」ということの本当の意味がわかりません。しかし、“ふうま”ほどではないにせよ、チェリンフもゲリラの端くれ、敵との戦闘に何回か遭遇しています。その意味では「闘う」という行為そのものは知っているのです。ですが、相手が今までの敵より何兆倍も、無限大的に強力な神様となると、もともと闘いにならないはずで

「論理的にはそうなるわよね。」

チェリンフは半ば捨て鉢になって答えます。

「チェリンフ。ぼくたちが勝てる唯一の可能性は」

「あなた勝つつもりなの？本当に瘋癲ふうてんになったんじゃないの？」

「あははは。大丈夫。ぼくは勝つつもりさ。そのためには、相手の弱点をつくことさ。」

(二)

「弱点？万能の神様の弱点？オールマイティーに勝つなんて、ゲームイズオーバーになってしまう。全宇宙の破滅だわ。」

「しっつ。大きな声をだしちゃだめ。神様の憲兵が聞いたらどうするんだ。チェリンフのさっきの言葉で気がついたんだ。ぼくたちの子供もド近眼になるかとか…」

チェリンフは青ざめて金縛りかなしばりにでも遇ったようにふるえいます。“ふうま”が絶望のあまり気が狂って…自分に全宇宙を道づれにした破滅的心中を決意したものと思ったからです。“ふうま”は彼女の額にキスをして、頭を自分の肩にだきます。

「チェリンフ。聞いて。神様もド近眼なんじゃないか。少なくともアルコールで極端に視力がおちているんじゃないか？その上強度の乱視があるんじゃないかなあ？ねえ。そう考えたら、何もかもつじつまが合うんじゃない？」

ド近眼に他人のド近眼を認識することは難しい。チェリンフは、神様が視力が落

ちていて強度の乱視がある、という命題に（この程度の神様の弱点なら）ふたりの希望が託されてもよいような気がしました。そう思うとすーっと力が抜けていくように感じました。

“ふうま”は耳に息がかかるくらい口を近づけて囁きました。

「もうひとつ確認。ふたりの子供を作ろうね。いいかな」

チェリンフは、その耳を熱くして、うなずきました。

「イヒヒヒ…」

突然“ふうま”は笑いだしました。

(三)

「やった。やった。よおし。チェリンフ。作戦×号の反対の作戦の開始だ。チェリンフ、君が指揮をとってくれ。地球に花をいっぱい植えよう。樹木をいっぱい植えよう。どこに・いつ・どのようにして、どんな草木と花を植えるかは、チェリンフの役目だ。地球をひとつの緑満載の花籠にするんだ。花がぼくたちの最初の子供なんだ。」

チェリンフは口をあけて、“ふうま”を見守るばかりです。突然主役がまわって来たからです。

「ぼくは最初、ヤケクソで同じことを考えた。どうせ死ぬんなら、作戦×号を知らないチェリンフを欺いて、ふたりの花の子供を沢山作って神様の鼻をあかそうと思ったんだ。たぶんチェリンフに罪は及ばないだろうし、その上チェリンフとぼくとの花という子供を残して死ねるし」

それから、ふたりの作戦会議。

東の空に白さが増し、鴨が水面でざわめきだし、雀や雲雀のつぶやきが始まりました。

チェリンフは、すっくと立ち上がりました。

「さあ。作戦開始。ぐずぐずしている時間はないわ！」



エピローグ

地球はまたたくまに花籠のよう。色とりどりの錦もよう。

あ〜っ。神様は長い酔いと眠りからさめ始めます。

急げ。ゲリラたち。

2匹のゲリラは、一方はタンザニア・キリマンジェロの山脈の山頂に手をかけ、他方はインドネシア・ニューギニア島のマーンダラ峰に手をかけ…それは赤道付近、地球の裏・表にある4〜5千メートル級の霊峰…顔を真っ赤にして力んでいます。地球の自転を早めようとしているんです。

かく言うわたしめも老いの眼。視力が落ちているせいでしょうか。赤・黄・緑の三原色が、だんだん混ざり合わさって、地球が白くそしてつるつるに輝きを増しています。神様の頭のように、ド近眼の乱視の神様の驚きと満足そうな笑顔が眼にみえるようです。

「作戦×号成功」

と。

おっととお。地球は透きとおって、老いの眼にはその姿をとらえることができなくなりました。

2匹のゲリラは？どこにもいません。
おそらく、花の下にもぐりこんだにちがいありません。巣を作ってるんです。
生まれてくるほんとうのゲリラの子供のために。
お幸せに。



お・し・ま・い

1984年6月4日 完

注)「プロローグ」では「これは、れっきとした悲劇なのです」と書きましたか？
あいすいません。ナレーターも年なもんですから、忘れっぽくて。中島みゆきの「忘
れっぽいのは、ステキなことです。そうじゃないですかあ」という悲劇的な調子を
思えば、この物語を書いた＝語った人物の悲劇と申せましょう。はい。

なお、中の挿絵は横浜・JR桜木町駅付近の落書壁画（2005年7月）から借用
しました。原作者にこの場を借りてお礼申し上げます。